

## 会員の声

# 補強材としてのジオテキスタイル

(株)補強土エンジニアリング 代表取締役 小川憲保

### 1. 補強土壁との出会い

1977年9月、造園技術者を目指していた私が失業中、何とか入社できた会社が帯鋼補強土壁のメーカーでした。これが私と補強土壁の出会いです。土木工学科を卒業したものの、造園の仕事をしてきた私にとって、補強土壁の業務はなじみが薄いものでした。ただ、当時は補強土壁自体が『海外から入ってきた新技術』でしたので、誰も経験者はいなく、皆で最初から学ぶことができたのは幸いでした。また、採用事例は少ないため、今のように分業体制ではなく、一人で営業・設計・製造・施工指導・開発等、補強土壁に関する一通りの業務を経験できたのはとてもよかったですと感じています。

### 2. ジオテキスタイルとの出会い

最初は補強土壁と言えば『帯鋼補強土壁』しかなかったのですが、1983年頃からアンカー補強土壁やジオテキスタイル補強土壁が市場に出てくるようになりました。これが私とジオテキスタイルの出会いです。このときのジオテキスタイルは、私が帯鋼補強土壁のメーカーに所属していたため、公平な立場で長所・短所を見るというのではなく、短所を見つけ出す対象物に過ぎませんでした。しかしながら、時間が経過してきますとジオテキスタイル補強土壁の長所も見えてくるようになりました。メーカーに所属している私は、帯鋼補強土壁しか扱うことはできません。技術者としては色々な補強土壁を扱っていきたいと思うようになり、1996年に18年間お世話になったメーカーを退職して、補強土壁専門の建設コンサルタントを設立しました。

### 3. 補強材としてのジオテキスタイル

建設コンサルタントを設立してジオテキスタイル補強土壁を含むあらゆる補強土壁の設計をするようになり18年が経過しました。補強土壁に出会ってからもう36年が経過していました。そこで補強材としてのジオテキスタイルを他の補強材と比較しますと、軽量で腐食しない等の長所がありますが、何といても引抜き抵抗力が断トツに大きいことが最大の長所だと思います。したがって壁面材の無い『補強盛土』はジオテキスタイル補強材の独壇場になっています。一方、短所ではないですが、難しいのがジオテキスタイルと壁面材との接続だと感じています。ジオテキスタイル補強土壁で新製品を開発する段階で、いつも障害となるのがこの接続部構造です。現在、色々な接続法があるのもその証だと思います。今後は、このような特性を有するジオテキスタイルが今まで以上に成長・発展していくのを楽しみにしながら見守っていきたいと思います。